第III章

「なぜ私？」^{じもん} セクーは自問した。「なぜアンティオキアの神が私を選んだのか？」
彼はアラビアの緑豊かな平原^{みどりゆた へいげん}を見つめていた。タラもまた見つめていたが、彼女は
えもの
獲物を探していた。

「ペルセポリスは近いぞ」と彼は叫び、偉大な都市^{いだい とし ほうこう}の方向へ走り出した。タラもそ
れに続いた。セクーは無敵だ^{むてき}と感じた。何かの力が彼を駆り立てていた。その力が
何なのか彼には理解^{りかい}できなかつた。獣^{けもの}と彼は一体となっていた。共に丘^{か ぬ}を駆け抜
け、広い支流^{しりゅう}を泳いで渡った。

彼らはアラビア半島^{はんとう}の森を歩き続けた。

Capitolo 3

すぐに夜が彼らを包み込んだ。血のように赤い雲が月を取り囲んだ。タラは不吉な
兆候に向かって吠えた。セクーは空を見上げた。星はもう見えなくなっていた。
不快な臭いが空気を漂っていた。普通の人ならその臭いで吐き気を催すだろう。

セクーはタラを見た。彼女の目は青く光っていた。彼女は風を味わうために舌を出
した。風は彼女の口から流れ出るように濃くて赤かった。

突然、彼の手首に光り輝く青いリストバンドが現れた。

Capitolo 3

うちゅう しんせい くつう さけ
宇宙の神聖なエネルギーが彼の体を流れ込み、彼は苦痛に叫んだ。タラは彼の前で
まばた けがわ
起こっている変化にいっさい瞬きをしなかった。白い狼の毛皮は夜の中で青く光っ
ていた。

か おお くうきちゅう ただよ
セクーは風に向かって立ち上がった。狩りが始まった。死の臭いが空気中に漂って
やみ へいげん はいかい ねら
いた。闇の王ミスラが平原を徘徊していた。「お前を狙うぞ！」とセクーは夜に向
さけ かりうど せい は
かって叫んだ。タラは吠えた。「今夜、ミスラ、お前は狩人セクーの聖なる刃を味
わうことになるだろう！」

タラがセクーの前を走った。

Capitolo 3

ちょうおんぱ ちょうかく ははおや ゆくえふめい とら
タラの超音波の聴覚が、母親が行方不明の子供を叫んでいる声を捉えた。木こりは家の隣の畑を探し、行方不明の少年シヴァを探していた。母親は近所の人々に尋ねた。

「シヴァはどこにいるの？」

きょうふ ゆが
皆が恐怖に顔を歪めながら彼女を見た。誰も行方不明の少年がどこへ行ったのか知らなかった。父親は困惑していた。彼らはシヴァを寝かせ、ドアを鍵で閉めた。それなのに、子供はいなくなっていた。

か すうしゅう
タラは辺りを見回し、空気を嗅いだ。家の周りを数周した後、白い狼は少年の匂いを嗅ぎ取った。彼女はセクーに向かってキャンキャンと吠えた。彼はタラを追って暗闇の中へ入っていった。

はら
10マイル離れた場所で、タラは腹ばいになり、セクーも高い草の上に倒れ込んだ。彼らは森の中の開けた場所に這い上がり、そこで子供を見つけた。

床には黒い星が石炭の粉で描かれていた。その中心には縛られたシヴァが横たわっていた。少年の周りにはミスラの手下たちのカバンが取り囲んでいた。13人の男女がこの邪教の一部となるように騙されていた。黒いローブをまとった彼らは、古代ゴモラ語で冒涇の言葉を唱えていた。

それは闇の王だけが理解できる言葉だった。そして中心には、高さ20フィートの巨大な怪物がいた。大きな7フィートの角がそれぞれ鋭い先端へと螺旋状に伸びていた。彼の肌はワニのような革のような質感で、目は赤く光っていた。

カバンのメンバーたちはローブを開き、鋭いナイフを見せた。それぞれが「イモータリスの儀式」に参加することになっていた。闇の王は、純潔な犠牲者の魂を差し出せば、不死を約束すると彼らに言っていた。

彼らの唱える呪文は少年に近づくにつれて大きくなった。ミスラは戦いを前にして高笑いをし、特定の遺伝子型の血を味わうことで永遠の命を得ることができると信じていた。

「もうたくさんだ! 」とセクーは叫んだ。 「不死ふしなどない。ミスラは全員あざむを欺あざむいている。アンティオキアの神への信仰しんごうこそが唯一ゆいいつの不死をもたらずのだ。」

タラはカバンに飛びかかり、一人の男の腕を引きちぎった。彼女はその腕を吐き出し、次に別の人物の首に飛びかかった。彼女の顎あごはその人の頸動脈けいどうみやくを噛み切った。

セクーの左腕まほうに魔法のように青い弓ゆみが現れた。彼は弓の弦げんを引いた。タラの目まばたが瞬きをする間もなく、青く輝く6本の矢みちびが神の導きてきかくのように的確めいちゆうに命中した。あと5人だ。

「お前しんじゃだな! 」とミスラは叫んだ。彼はセクーの青いリストバンドかたに気づいた。 「私の信者せに冒涇しまつを語るな。私に背を向けるな、アフリカ人よ。お前をナザレ人のように始末してやる。」

白い狼が前方に飛び出した。彼女は少年の上に立ち、残る手下たちに向かって唸り声と吠え声をあげた。彼女の唾液が床に滴り落ちた。

「白魔法で私に挑むとは！」とミスラが叫んだ。

その瞬間、セクーの手に青く輝く手裏剣が現れた。彼は立っている黒いローブの手下たちに向かって手裏剣を投げつけた。すべてが命中し、各ローブは地面に倒れ、黒い石炭の粉の山を形成した。

ミスラはセクーが青く輝く刃を取り出すのを見ていた。

「血と火について教えてやる」とミスラは叫んだ。「私は五千年もの間、ヒンドゥークシュを支配してきた。セクー、お前を滅ぼしてやる。それは約束だ！」

悪魔（人間が二本足で歩くことさえできなかった時代のもの）は、ローブを脱ぎ捨て、死体ですら嫌悪するほどの恐ろしい姿を露出した。

彼は手をあげ、セクーに向かって巨大な明るいオレンジ色の炎を放った。

セクーのリストバンドは青いバリアを放出しました。この魔法のバリアは彼、タラ、そして子供のシヴァを炎から守り、跳ね返した。

タラは子供から離れ、セクーに向かって駆け出した。彼女はセクーを飛び越え、
ダークロードに向かって飛びかかった。彼女の顎が彼の革のような頭に近づくとつ
れて、目には血の渴望が輝いていた。しかし、彼女の獲物に近づくと、ミトラは
悪臭のする硫黄の雲の中に消えた。残されたのは数十匹の死んだ毒蛇と石炭の粉だ
けでした。戦いは終わった。

タラの目は元に戻りました。セクーの腕の青いリストバンドは消え、魔法の青い弓
と手裏剣も見当たりませんでした。辺り一面に石炭の粉が散らばっていました。

「タラ、この悪魔たちは石炭を崇拝していた。彼らは今や石炭だ」とセクーはミト
ラの手下たちが達成した不死の皮肉を笑いました。

「小さな坊や、大丈夫か？」とセクーはシヴァに微笑みました。彼はシヴァを抱き
上げ、慎重に包みました。彼らは赤ん坊を両親のもとに返すために、再び森林地帯
へと戻っていきました。

ミトラの手下たちが再び現れないように、タラは警戒を怠りませんでした。

木こりとその妻は、子供のシヴァが戻されたときに大喜びしました。父親が^{たず}尋ねました。「あなたの名前は？」

「私の名前はセクーです」と彼は答えました。

木こりはさらに尋ねました。「あなたは誰に祈りますか？」

「私はアンティオキアの神に祈ります」とセクーは言いました。「彼には名前がありません。」

アンティオキアの神は夜明けと共に彼らの上に立っていました。その日、世界は^{いだい}偉大な^{せんし}アフリカの戦士の名前を知ることとなりました。その日、セクーとタラの^{でんせつ}伝説が生まれました。

いいえ、これは終わりではありません。私たちは始まりにいます。